農業が天職

中山正樹さんは20歳から60歳まで40年間農業に従事。梨園が4ha、水稲が12haある。昔は酪農も行っていたという。規模拡大を目指し日々挑戦を続けてきたベテラン農家だ。農業の楽しさは、作物と話ができること。手を加えた変化を返してくれること。

親が農業者で、きょうだい4人の末っ子長男だったため、子供の頃から後を継ぐという意識があったという。48歳の時には早くも息子に経営を移行。今は息子の手伝いを行い、家族で農業をやっている。息子に継いだ後、15年前から地元の農協JAなす南で非常勤の役員に就き、現在は代表理事専務。農協の方向性を決めていく。農作物は、どの箱を開けても、品質の差がないものを出荷するよう心がけているそうだ。小さな農協だからこそきめ細やかなチェックができる。特に梨の選果場が優れていて、梨が傷まないようカメラで選果し、転がさずに横移動する機械を使用している。今年は新型コロナウイルスで輸出事業は厳しいが、良い点を前面に出して、PRを強化する姿勢だ。

〈プロフィール〉
中山正樹さん
那須烏山市出身　63歳
JAなす南　代表理事専務

住み続けること

那須烏山市に住み続けていて、昔と今で変わった点について聞いてみると「農業は基本的に変わらないが、商店街がなくなった」と話してくれた。これは人の生活範囲の広がりが原因とみられる。また、若者などは都市に魅力を感じ、那須烏山市を出ていく傾向が顕著だ。15年前には旧南那須町に約1万3千人、旧烏山町に1万9千人いたが、現在は那須烏山全体で2万6千人ほどしかいない。若者の都市への転出、未婚者の増加は、那須烏山の街や人々のライフスタイルに変化を及ぼした。「これから居住してくる人に期待している」と語った。

中山さんの家族は、ご夫婦と息子夫婦と孫2人。他に子供は娘2人。那須烏山市は、JR烏山線の沿線沿いに家を建てれば子育てに問題はないとのこと。そういう意味でも、烏山線は今後も重要な公共交通だ。

「家族にも適切な距離があり、相手の事を考え、接しなくてはならない」と、プライベートを守るための適切な距離の重要性も語ってくれた。

若者へのメッセージ

農業という好きなことを仕事にしてきた中山さんから、「楽しんで仕事をやってもらいたい。お金は後からついてくる」とアドバイスをいただいた。農業の楽しみは枝の配置など自分の思い通りにできること。収入面でも成長を実感できたことも大きい。今は農協役員の立場からみる農業のあり方に興味を持ち、農業従事者を増やしたい考えだ。何よりもやる気があることを重要視する。自分をどう生かすかを考え、経験から学んでほしいという。好きなことで規模拡大という挑戦をしてきた中山さんの経験が語る。

「台風の被害や現在の新型コロナウイルスの問題など常に抱える問題はあるが、それも次に進むための経験だ」と前向きだ。好きなことをして生きているからこそ、嫌なことや問題を乗り越え、先の目標のために頑張れるのだろう。

担当:深石義倫